吉田千秋の業績を顕彰

「琵琶湖周航の歌」の作曲者

ポストコミュニティ 179

新潟県／小合郵便局
新藤幸生局長

♪われは湖（うみ）の子
さすらいの
旅にしあれば　しみじみと
昇る狭霧（さぎり）や
さざなみの
滋賀の都よ　いざさらば

おなじみの琵琶湖周航の歌。日本学生歌の一つで、旧制三高（現、京都大学）ボート部の寮歌だ。加藤登紀子が昭和46（1971）年にカバーしたことで一般に知られるようになったが、大正6（1917）年に誕生し、琵琶湖を巡る情景が歌われている。

この歌のヒットにより、旧制三高OBらが調査を始め、滋賀県今津の船宿で部員の一人が自作の詩を発表、それを当時流行していた歌「ひつじぐさ」のメロディーで歌ったところ、具合よくマッチして「琵琶湖周航の歌」が誕生した。

小口太郎作詞、作曲者不明となっていたが、調査の結果、吉田千秋作曲と判明した。小口太郎は長野県岡谷市市出身で、諏訪湖の畔で少年時代を過ごし、旧制三高卒業後に東京大学へ進み、在学中に電信電話の双方向通話システムを開発し、世界8か国で特許を取るなど、将来に大きな期待がかけられたが、26歳の若さで自ら命を絶ってしまった。

一方、原曲（ひつじぐさ）を作曲したことで知られる吉田千秋（1895～1919年）の生家（吉田家住宅）は新潟市秋葉区大鹿にある。明治期を代表する歴史・地理学者である吉田東伍の二男で、幼いころから芸術に関心を持ち、独学で作曲して音楽雑誌に投稿するなどしていたが、24歳の若さで病死した。

昨年7月24日には、「ちあきの会」主催で「ひつじぐさ」発表から100年のイベントが地元で開催されたが、この会の会長は新潟県下越南地区郵便局長会（計良正人会長／新潟粟山）の小合郵便局・新藤幸生局長である。

新藤局長は地元で生まれ育ち、民間企業に約10年勤めた後、父親の後任局長として平成2年3月24日付で3代目の小合局長に就任、26年目を迎えている。

幸生少年はおとなしく、体を動かすことは苦手であったが、頼まれると断ることができない奉仕の精神が旺盛だったという。娘さんが小学校に入学すると、PTAの役員などを引き受け、中学校ではPTA会長を務め、その後も青少年問題をはじめ福祉・交通・観光関係や自治会活動に幅広く関わり、現在まで数えきれないほどのボランティア活動に携わっている。

その一つが「ちあきの会」。創設のきっかけは「世の中の常識が変わり、子どもたちも目標を持たなくなる傾向が強まり、覇気がなくなりつつある。目標を持つと、何とか達成しようと意欲が出て頑張り、意識や行動も素直になる。そこで、何とか子どもたちを激励し、多くの人が知っている歌の原曲を知ってもらおうと考え、仲間数人が中心となり、『琵琶湖周航の歌』のメロディであり、『ひつじぐさ』の作曲者である地元出身の吉田千秋に関する調査をすることにした」と説明してくれた。

この活動は、作曲者が「新潟県の人であること」を多くの人に知ってもらうことも兼ねており、今から15年前に設立し、会員は現在150人ぐらいいるそうだ。

新藤局長によると、調査と並行して行ってきた主な活動やイベントは、「吉田家での遺品展示」「東伍と千秋」に関しての鼎談や講演会、小合合唱の会の「15周年コンサート」「ひつじぐさ」発表から100年目の「千秋100年物語～新たな歴史がここから始まる」コンサートなどで、情報によると来年は滋賀県で「琵琶湖周航の歌」誕生100周年記念行事が行われるようだ。

ところで、千秋が作曲した「ひつじ草」は、睡蓮の大和言葉からつけられたものだが、尾瀬沼で有名な「ひつじ草」は睡蓮の原種で、皇室では「おしるし」としてトレードマークの花を持ち、雅子さまは「ハマナス」、愛子さまは「ゴヨウツツジ」、結婚された黒田清子（紀宮）さまは「ヒツジグサ」である。

新藤局長は「これまでの活動は、郵便局を地域の皆さんに広く知ってもらおうとした結果であり、局長本来の仕事に何ら反するものでないことを若い局長に伝えたい」と語る。

（川口弘一）